

【漢字関連文字】

古今の使用文字を記入した東アジア一帯の地図を眺めると、そこには特徴を異にした数多くの文字がある。地図上の文字は、ただ並立しているのではなく、互いに様々な関係を持ち、同時に幾つかの主要な構造の中に位置づけられる。その構造の一つに、漢字（狭義の漢字。漢語および漢語の祖先を表記した文字）とそれ以外の文字、すなわち中心と周辺がある。漢字は、紀元前1300年頃の甲骨文字より現代の簡体字に至るまで、三千数百年に渡り東アジアの文化を支える柱であった。周辺の民族は、漢字で書かれた情報や、情報伝達の道具である文字を求め、柱たる漢字に近づいた。その接触の過程で、漢字に由来する文字や漢字と関連のある文字を使用するようになった。そのような文字群を「漢字関連文字」という枠組みに収めて分類すると次のようになる。

・漢字関連文字

1.漢字系文字

- a.変用：万葉仮名、侗族の文字など
- b.変形：字喃、壮族の文字など
- c.派生：仮名、女書

2.擬似漢字系文字：契丹文字、西夏文字、女真文字など

3.非漢字系文字：ソグド文字、パспа文字、ハングルなど

漢字関連文字は漢字から作られた漢字系文字、漢字に似せて創製された擬似漢字系文字、漢字と系統を異にするが関連のある非漢字系文字からなる。これは文字の系統分類ではない。文字組織全体から見た漢字との関連性によって分類したものである。ここで言う文字組織は、①字形を形作る文字要素と文字、②文字要素を組み合わせて文字を作る方法、③文字を互いに区別したり同類にまとめたりする方法、④表音と表意の方法、⑤縦書き・横書き・分ち書きなどの文字配列法よりなる。

【漢字系文字】

漢字系文字は、漢字が備える字形・字音・字義をそのまま用いるのではなく、いずれかを変え、自己の言語の表記に利用したものを指す。利用の仕方により変用、変形、派生の三種をたてる。この三種の用語は西田龍雄2002による。

(1) 変用による文字は、既存の漢字の字形と字音を利用したもの（仮借）、及び字形と字義を利用したもの（訓読）が基本である。日本の『古事記』や『万葉集』（ともに8世紀）に使用された万葉仮名がそれにあたる。「波流」という漢字の音を借りて日本語の「はる（春）」を表わす音仮名や、漢字の訓読より発した「八（ヤ）間（マ）跡（ト）」を用いて日本語の「やまと（大和）」を表わす訓仮名は変用の典型である。

(2) 変形による文字は、漢字の要素を組み換えたもの、及び筆画を増減したものである。変形を加えているが一見して漢字系統の文字であることがわかる。ベトナムの字喃（チュウ・ノム）は変形文字が充実しており、この文字を持つ典型としうる。字喃は10～11世紀に組織化され20世紀初頭まで使用された。「巴」（字音）と「三」（字義）を組みあわせて「懺」を作りベトナム語の[ba]（数字の三）を、「天」（字義）と「上」（字義）を組み合わせ「權」を作りベトナム語の[coi]（空）を表わす。

(3) 派生による文字は、漢字の字形を改変して作った新しい文字である。漢字の字形とは似ておらず、解釈を経た後に漢字との字形上の関係が判明する。周辺民族の言語を記したものは当然として漢語を記したものも含める。前者に日本の仮名があり、後者に中国湖南省の女書（ニョシヨ）がある。

日本の仮名には万葉仮名の草書体より発展した平仮名と、万葉仮名の部分より発展した片仮名がある。「安、以」などの草書化より「あ、い」などが、「阿、伊」などの偏よ

り「ア、イ」などができた。共に9世紀から資料がある。これらは日本語の音節を表わす文字として組織された。文字が意味を担うことはない。

女書は、中国湖南省の漢語方言を表記した文字である。当地の女性だけが使用することより、女書と呼ばれる。外形は縦長の菱形で、やや右に傾いている。字数は異体字を含め約3,600。字形の由来と文字発生の時期については諸説あるが、約600の漢字楷書体に基づき、明末清初から清代中期頃に発生し今に至ったとする説が穏当であろう。一字は一音節で、縦に右から左に綴り、意味の切れ目を明示しない点などは漢字と同様であるが、その字形は漢字に似ておらず、音節の利用の仕方も漢字とは異なる。同音および近似音の音節の間で文字の仮借が頻繁に繰り返された結果、特定の字義を担う働きが弱まり、仮名のような音節を表わす表音文字の様相を呈することとなった。

【中国少数民族の漢字系文字】

変用、変形、派生による文字のうち、変用・変形文字は中国周辺の少数民族の間で広く用いられた。①中国の湖南省・広西壮族自治区・貴州省一帯の侗(カム)族は、「消」の字音を借りて侗語の [ca:u](あなたたち)を表わし、「風」の字義を利用してこれを侗語の [ləm](風)で読む。前者が仮借で後者は訓読である。侗族の文字は変用が主体であることから「a.変用」の下に収めたが、変形による文字もある。人偏「イ」(字義)と「不」(字音)を組み合わせて「𠂔」を作り、侗語の [pu](父)を表わす。文字資料の初出は明末清初であり、現在でも使用される。②中国雲南省の哈尼(ハニ)族の文字がある。一般に使用された文字ではないが、20世紀中頃以前の資料が僅かながらある。③広西壮族自治区の壮(チュワン)族の文字。古くは唐代に溯る資料がある。文学作品をはじめ多方面にわたる資料があり現在でも使用される。④中国湖南省の苗(ミャオ)族の文字。清末に苗族の知識人が考案した文

字で、今でも相当に広い範囲で使用される。

⑤中国貴州省の布依(プイ)族の文字。変用文字が主体であるが80字ほどの変形文字も報告されている。⑥中国雲南省の白(ハク)族の文字。古くは唐代に発し今も使用される。この文字は変用・変形文字であるが、時代が下るに従って変形文字の使用範囲は縮小し、逆に変用文字の仮借の利用が増えるという興味深い傾向がある。さらには⑦雲南省・広西壮族自治区一帯の瑶(ヤオ)族の文字がある。これらの中国少数民族は変用文字と変形文字を併用する。その言語は、漢語と同様に、形態素(最も小さな意味の単位)が単音節主体となっている。

なお、漢字系文字の使用地域は中国周辺の南方一帯に偏っている。これは、北にモンゴル語や満洲語や朝鮮語など形態素が複音節主体の言語があり、南に形態素が単音節主体の中国少数民族の諸語やベトナム語があることと無関係ではない。北方の諸民族も当初は漢字漢文を利用しており、後には漢字に似せて契丹は契丹大字を作り、金は女真文字を作った。これらは擬似漢字系の文字であるが、漢字系の変用・変形文字も含んでいる。このような例もあるが、北方の諸民族は概して漢字系の変用・変形文字を発展させることはなく、ソグド文字に発するウイグル文字・モンゴル文字・満洲文字・シボ文字を使用した。ソグド系の文字は単音を表わす表音文字である。形態素が複音節主体の言語を話す北方諸民族にとって、漢字系文字よりもソグド系の表音文字の方が、はるかに利用し易かったのであろう。

もともと、南方の中国少数民族の間で使用された漢字系文字も、1950年代以降は新中国の政策によりラテン系文字が正式な文字として採用されたため、現在ではラテン系文字に取って代わられる趨勢にある。隣国のベトナムでも漢字系文字の字喃からラテン系文字に切り替わっており、漢字系の変用・変形文字の使用範囲は急速に縮小している。

【擬似漢字系文字—契丹大字と契丹小字】

擬似漢字系文字は漢字に似せて作られた新たな文字である。まずは遼、西夏、金の創製文字を挙げることができる。これらの文字は10世紀から12世紀にかけて東アジアの北側の地域において創製された。みな国定の文字である。国が滅ぶと文字使用の伝統も絶え、解読が必要な文字として今に至った。その他に、中国貴州省水(スイ)族の文字、中国雲南省頃尚(リス)族の文字も加える。こちらは民間で起こった非公式の文字である。

(1) 10世紀の初め遼(916～1125年)で契丹文字が作られた。契丹文字には大字と小字の二種があり、この文字でモンゴル系の契丹語が記された。先ず大字が作られ次いで小字が作られた。

契丹大字は遼の太祖阿保機(アボキ)が920年に公布した表意文字で、漢字の俗字体の筆画を増減して作ったものである。その数1,800余り。漢字をそのまま利用したもの約1/5、筆画を増減して作ったもの、漢字を組み合わせて作ったものもある。これらは漢字系文字である。その他に、漢字との関係を明示し得ない文字が多数ある。解読にあたり、契丹大字文と漢字漢文が併記された碑文を利用する。また金の女真文字には大字を参考にした部分があるため、漢字と女真文字を参照する方法も採られる。表意文字の場合、一字一字につき音と意味を解明しなければならず、よほど条件が良くないと全面的な解読は難しい。大字はほんの僅かしか解読されていない。

(2) 契丹小字は太祖の弟迭剌(テツラツ)がウイグル文字の組織に学んで作った文字である。大字公布より数年の後に作られた。単音または音節を表音的に表わす基本字が380ほどある。これをハングルのように左右上下に組み合わせ、正方形や縦長の長方形に外形をまとめあげて一つの単位とする。その際、語幹に接続する接尾辞は連書されて一つの単位となる。この単位は、意味の切れ目に対応しており、分かち書きの役目を果たす。分か

ち書きはウイグルの文字組織に学んだものである。基本字を綴り合わせて語音を表記するので、糸口さえ掴めれば次々と文字の音を明らかにすることができる。碑文には漢語の人名や官職名などを小字で音写した部分があり、これを糸口として小字の研究はだいぶ進んでいる。小字による借用漢語の音写の法も時代を下るに従って次第に精密になるという興味深い現象もみられる。ただし、契丹語を記した部分の解読が難しく、既に滅んでしまった契丹語を構築しながら解読を進めているという状況である。基本字は漢字や契丹大字に似ている部分もあるが、その由来について定説はない。なお、小字には篆書体がある。これは漢字篆書体に学んだものである。

【擬似漢字系文字—西夏文字と女真文字】

(1) 11世紀には西夏文字が作られた。初代皇帝の李元昊が、大臣の野利仁榮らに作らせ西夏(1038～1227年)建国の直前1036年に公布した文字である。チベット系の西夏語を記した表意文字であり、文字を方形にまとめ縦に右から左に綴る点は漢字のような印象を与えるが、その文字要素は漢字とは似ていない。文字要素を組み合わせる方法は漢字を模したものとされる。篆書体もあり、これは漢字篆書体に学んだものである。先に表意文字は条件が良くないと全面的な解読には至らないと言った。西夏文字の場合、字典や韻書に始まり様々な資料が残っている。その中でも西夏語と漢語の対訳語彙集である『番漢合時掌中珠』(1190年)は初期の解読にとって極めて有用であった。解読にとって理想的な条件の下にあったため研究は急速に進み6,000余りの文字はほとんど解読され今では大部の字典もある。あとはこれまでの説の修正と精密化が待たれる。この文字の魅力は資料の豊富さにある。先にみた契丹文字の場合、主な資料は哀冊や墓誌銘であり、大字と小字をあわせて二十数種しかなく、解読されたとしても資料数や分野が限られているため影響も限定されたものとなる。その点、

西夏文字には様々な分野にわたる膨大な資料がある。

(2) 12世紀には金(1115~1234年)で女真文字が作られた。この文字には、契丹文字と同様に、大字と小字があった。大字は、金の太祖阿骨打(アクダ)の命により、完顔希尹(ワヤンキイン)が漢字楷書と契丹文字の両者に基づいて作ったものである。1119年に公布された。その後、第三代皇帝熙宗の時代に小字が作られ1138年に公布された。大字と小字はどこが違うか諸説あり定説を見ないが、現存する女真文字資料が表意文字と表音文字の混合であるとする点は諸家の一致するところである。ちょうど日本の漢字仮名混じり文のようなものである。文字数は約750。その中に漢字に直接由来するもの、漢字よりできた契丹文字に由来するものなどの漢字系文字が含まれる。その他に、契丹文字に由来するもの、漢字や契丹文字に似ているが派生関係が明らかでないものがある。主な資料は金代の碑文と明代の『女真館訳語』である。後者は漢語と女真語の対訳語彙集と例文集で、女真文字の解説に果たした役割は大きい。当初より、この文字で書かれた言語は清朝の支配者の言語である満洲語に近いことがわかっていた。研究も進み今では辞典もある。

【擬似漢字系文字—水文字と頃尚文字】

(1) 中国貴州省水(スイ)族の水文字がある。これは水族の祈祷師が使用する表意文字で、明代から現代の資料がある。総字数は1,200余り。異体字を除くと480ほどになる。象形性の強い独特の文字の中に、漢字の天地や左右を逆にしたものなど、漢字を改変した漢字系文字が混じる。文字が方形で縦に右から左に綴る点は漢字の文字組織を彷彿とさせるが、漢字系ではない文字を多く含む。

(2) 次に中国雲南省頃尚(リス)族の文字がある。1920年代初期、維西県の頃尚族農民の

汪忍波によって考案されたもので、現在でも一定数の使用人口を持つ。字数は900余り。音節を表わす表音文字である。独特の文字の中に、漢字や他の少数民族文字から字形のみを借りた文字が混じる。例えば、漢字「囚」で頃尚語の[do](出る)を表わす。文字が方形で縦に綴る点は漢字と同じであるが、行は左から右に進む。この点は漢字と異なる。

【非漢字系の漢字関連文字】

非漢字系の漢字関連文字は、字形は漢字と系統を異にするが、文字組織のいずれかに於いて漢字の影響を被った文字である。

(1) まず、北部アジアのソグド系文字を挙げることができる。ソグド文字はソグド語を記した文字であり、アケメネス朝ペルシアの公用語であったアラム語を記したアラム文字に発する。西方よりアジアの北部へと伝わった。ウイグル文字(9~14世紀)、モンゴル文字(13世紀~今に至る)、満洲文字(17~20世紀)と改良されながら伝わり、現在の中国新疆ウイグル自治区の錫伯(シボ)族のシボ文字や中国内蒙古自治区のモンゴル文字となった。これらの文字をソグド系文字と称する。単音を表わす表音文字である。さて、アラム文字は右から左に横書きされた。ソグド文字も同様であったが、6世紀末の碑文に縦書きされたものがある。7世紀前半、玄奘の『大唐西域記』にもソグド文字は縦に書かれるとの記述がある。なぜ縦書きが現れたか、定説はないようであるが、これを漢字漢文の影響とする見方もある。

次のウイグル文字になると、初期のものを除き大部分は縦書きされるという。縦書きといっても行の方向は漢字漢文とは逆で、左から右に進む。これ以降のソグド系文字は全て縦に左から右に綴られ、その結果として、書物や碑文の上でソグド系文字による文と漢字漢文を併記することが容易になった。なおソグド系の諸文字のうち、満洲文字は篆書体を持っている。これは漢字篆書体に学んだもの

である。

(2) 13世紀にはパスパ(パクパともいう)文字が作られた。フビライがチベット僧パスパに命じて作らせ、元(1271~1368年)建国の直前1269年に公布した。フビライ統治下の諸言語を表記するためと言われる。これまでにモンゴル語、漢語、トルコ語、チベット語、サンスクリット語を記したものが発見されているが、現存する資料の大半はモンゴル語と漢語である。チベット文字を漢字風に角ばらせて作った文字で、単音を表わす表音文字となっている。字形を方形にまとめる点、一音節毎の切れ目はあるが単語など意味の切れ目に対応した分ち書きがない点は漢字の影響である。縦に左から右に綴る点はモンゴル文字の影響である。モンゴル人は、パスパ文字を作る前より、ウイグル文字に発するモンゴル文字(ウイグル式モンゴル文字ともいう)で自分達の言葉を書いていた。パスパ文字作製の後、従来の文の文字をパスパ文字に置き換えて文章を綴った。結果としてモンゴル文字より書写の方向を受け継ぐこととなった。パスパ文字は元一代に渡って使用され、元の滅亡とともに公式には文字使用の伝統も絶え、解読の必要な文字となった。解読といっても、チベット文字の知識とこの文字の歴史的な背景に対する理解があれば比較的容易に読み解くことができたため、19世紀中頃にはヨーロッパ人によって本格的な解読がなされていた。なお、パスパ文字には篆書体がある。これも漢字篆書体に学んだものである。

(3) 15世紀にはハングルが作られた。李氏朝鮮の第四代世宗の命によって1443年に作られ1446年に公布され、今に至っている。字母は単音を表わす表音文字であるが、それを音節単位に組み合わせる。表音文字であるところはパスパ文字などに原理を学び、音節毎に組み合わせて文字単位をなすところは漢字に学んだとされる。なお初期のハングルが縦に右から左に綴られた点、一音節毎の切れ目はあるが単語など意味の切れ目に対応する分ち書きがなかった点も漢字組織の影響であ

ろう。

(吉池孝一)

〔関連文献〕

西田龍雄『アジア古代文字の解読』中央公論新社,2002(もと『アジアの未解読文字』大修館書店,1982)。西田龍雄『漢字文明圏の思考地図』PHP研究所,1984。周有光「漢字文化圏の文字演変」『民族語文』1989:1,1989。中国民族古文字研究会編『中国民族古文字図録』中国社会科学出版社,1990。中国社会科学院民族研究所主編『中国少数民族文字』中国蔵学出版社,1992。河野六郎『文字論』三省堂,1994。河野六郎・千野栄一・西田龍雄編著『言語学大辞典 別巻 世界文字辞典』三省堂,2001。趙麗明「漢字侗文與方塊侗字」『中国民族古文字研究(第三輯)』天津古籍出版社,1991。王鋒「方塊白文的歴史發展和現状」『中国民族古文字研究(第四輯)』天津古籍出版社,1996。陳其光『女漢字典』中央民族大学出版社,2006。聶鴻音「契丹大字解読淺議」『民族語文』1999:4,1999。清格爾泰他『契丹小字研究』中国社会科学出版社,1985。西田龍雄『西夏王国の言語と文化』岩波書店,1997。金啓琮編著『女真文辞典』文物出版社,1984。曾曉渝・孫易「水族文字新探」『民族語文』2004:4,2004。木玉璋「頃尚族音節文字造字法特点簡介」『民族語文』1994:4,1994。

2007年1月書き終わる